京丹後版
地域づくりのヒント。

新コミュのススメ

KOHO KYOTANGO BESSATSU

New Community

地域の人を、思いを、取り組みをまとめた一冊！

保存版

新コミュのススメ
刊行にあたって

それぞれの地域が持つ多彩で多様な歴史、文化、習慣、そして人。
この「新コミュのススメ」には、ユニークで創造的な地域がたくさん登場します。
地域に新しい価値観を取り入れ、失敗を怖れずチャレンジする。
そんな地域の取り組みを紹介しています。

〝どんな人たちが、どんな取り組みをしているのか〟
ぜひ知ってください。
失敗や課題に共感するところもあれば
自身の地域が抱える問題の解決につながるヒントがあるかもしれません。

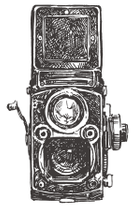
読み終えた後、皆さんの中に何かしら発見があれば
それはきっと地域をもっと良くする可能性の種となります。
これを機に「地域行事に参加してみようか」なんて思っていただければ幸いです。

地域は、そこに暮らす全ての人が関わる共同体です。
自分の住む地域を、元気で住みよい、いつまでも続く居場所にするため
一歩踏み出してみませんか。

【新たな地域コミュニティ（新コミュ）】
人口減少や高齢化により行政区の機能低下が危惧される中、京丹後市では、地域が行政区を超えた旧校区や旧村などの範囲で新たな地域コミュニティを形成し、若者や女性など多様な人材の参画を促しながら、地域が主体的に行う課題解決や取り組みを支援しています。

新コミュのススメ

KOHO KYOTANGO BESSATSU



地域には、ドキドキ
ワクワクするような
取り組みがある。

新コミュのススメ

KOHO KYOTANGO BESSATSU

新コミュの詳しい
取り組みはコチラから

CONTENTS 目次

はじめの一歩の踏み出し方 峰山町 五箇 6
理想の事務局って？ 久美浜町 佐濃 8
いろんな人を巻き込みたい 大宮町 全域 10
公民館活動、どう続ける？ 久美浜町 川上 12
みんなの居場所をつくろう 久美浜町 一区 14
花火で地域づくりって？ 丹後町 豊栄 16
写真「私たちがつくる地域」 18
子どもとつくる地域って？ 久美浜町 湊 20
防災 × 結束力 弥栄町 鳥取校区 22
よそ者って何してくれるの？ 網野町 島津 24
みんなで農地を守るには？ 久美浜町 二区 26
伝統は笑顔でつなぐ 弥栄町 吉野校区 28
元気の秘訣って？ 弥栄町 野間 30
みんなの地域はみんなで守る 丹後町 宇川 32
新コミュとは
みんなが主役の地域づくり 34

はじめの一歩の踏み出し方

二箇・久次・五箇・鱒留の４区からなる五箇地域。
人口減少や高齢化、地域の課題は山積みで何から始めればいいのか迷いながらも
勇気をもって動き出し、試行錯誤する五箇地域から
地域の未来を描く「はじめの一歩」の踏み出し方のヒントを探ります。

五箇地域を支える区長たち。㊧から井上高司さん（二箇）、横山文明さん（鱒留）、安田和幸さん（五箇）、稲穂哲男さん（久次）

思い切って地域のみんなを頼ってみよう

新しいことを始めるには、大変なエネルギーが必要です。それでも、五箇地域の区長たちが、地域づくりの新たな一歩を踏み出す決意をしたのは、自分たちの慣れ親しんだ土地の10年後を想像したから。

〝このままだと五箇はどうなる？〟

地域の未来を想像したとき、自然と「どうにかしないといけない」という気持ちになったといいます。しかし、何から始めたらいいのか。スタートから壁にぶつかりました。区長たちは膝を突き合わせて何度も話し合い、五箇の活性化について相談しました。行きついた答えは「自分たちだけで打開策は見えてこない」、「思い切って地域の人に聞いてみよう」というものでした。

こうして、地域の方々を集めた意見交換会を開催することとなります。

作戦会議は〝楽しいもの〟

意見交換の場をどのような形で開催するかも重要で、大切なのは参加者が意見を言いやすい環境をつくること。「参加型のワークショップはどうか」「どの世代に来てもらうか」「発言しやすくするには」――。内容について、区長みんなで集まって作戦会議を行いました。課題を共有しながら1つずつクリアしていくことで、会議はどんどん楽しくなっていったそうです。その中で、1つルールを決めました。「主役は参加する地域の人たち。とにかく話を聞こう、自分たちは聞き役だ」。

一人では無理でも仲間がいれば踏み出せる

ウッディいさなごで行ったワークショップには、多くの地域の方々が参加。もしかしたら、地域のみんなもこんな機会を待っていたのかもしれません。自由に話してもらうことで、アイデアやヒントがどんどん飛び出し、終わってみればワークショップは大成功。区長だけでは、思いつかないような意見をたくさん集めることができました。

こうして、五箇の新コミュはスタートを切りました。仲間たちと何度も話し、悩みを共有して考えてきたからこそ踏み出せた「はじめの一歩」。もし、スタートの仕方に悩んでいるのなら、まずは近しい人と地域の未来について話してみると良いかもしれません。

五箇の朝市

地域トピックス／五箇

五箇地域では新たな地域資源が生まれている。地域の生産者や加工業者が連携して実施する朝市は、地域の交流の場としても浸透しつつある。また、地域おこし協力隊によるサウナ「蒸 - 五箇サウナ -」も、地域外の人が五箇を知るきっかけになっている。いろんな人たちが「はじめの一歩」を踏み出している五箇地域。これからますます面白くなりそうだ。

1 五箇 Mineyama goka

理想の事務局って？

佐濃自治会の事務局、通称「チーム佐濃」。
いつも穏やかなメンバーですが、地域づくりへの思いは誰よりも強いといいます。
それぞれの得意を生かしつつ主体的に動き、地域づくりを進めるチーム佐濃から
理想の事務局のヒントを探ります。

チーム佐濃。㊧から地域おこし協力隊の羽尻晶 隊員、山形健一 副会長、森本賢一郎 事業推進部長、松本哲朗 自治会長、事務員の黒田吉治さん

2 佐濃 Kumihama sano

思いを伝えよう

17の集落からなる佐濃自治会が誕生したのは平成28年。当時、立ち上げに声を上げたのが、現在、事業推進部長を務める森本さんでした。「複雑化する地域課題の解決のために、新しい地域の枠組みを作って助け合ってはどうか」。反対意見も出る中、根気強く思いを説明しながら各地区を回り、協力してくれる仲間を集め、佐濃自治会を立ち上げたといいます。

仲間を見つけよう

〝一人じゃできないことも仲間がいればできる〟この、当たり前のことがとても重要で、佐濃では仲間の輪が地域づくりを支えています。しかし、この「仲間づくり」が、どの地域においても容易でない課題の一つではないでしょうか。

もし、あなたが地域をまとめる立場にあるなら、まずは身内からでも協力してくれそうな人に声を掛けてみましょう。逆に、まとめる立場の人から協力をお願いされたら、考えてみてください。自分の住む地域が「もっと○○ならいいのに」と思ったことはありませんか。もし、少しでも思ったことがあるなら、その思いを表に出して地域づくりの仲間になってみませんか。あなたの思いに共感してくれる新しい仲間と出会えるかもしれません。

「やってみたい」を見守ろう

佐濃には、公民館を含む5つの部会があり、それぞれが主体となって取り組みを企画し、実践に向けた提案をします。佐濃の部会の特徴は、主体性とそれを広い心で見守る事務局の存在。「良いも悪いもやってみないと分からない」という〝やる前から否定しない〟事務局の方針のもと、取り組みがどうしたらうまくいくかを一緒に考えます。始める前から「それじゃダメ」ではなく、「一度やってみよう」の後押し。部会に丸投げするわけではありません。〝一緒に考え〟〝優しく後押しする〟のです。事務局が求めることはきちっと言うけれど、否定はせず、優しさを持って接する。佐濃自治会の活動には、そんなおおらかさがあります。

この姿勢が、組織の主体性を育み、新しい仲間を増やすきっかけになっているのかもしれません。

地域トピックス／佐濃

農業体験

おとなの笑学校

佐濃には、生涯学習の場として、地域の人が講師になったりピアノを弾いてみんなで歌うシニア世代対象の「おとなの笑学校」がある。また、地域おこし協力隊と連携して子育て中の親子がゆっくりできる場をつくり、地域の人と一緒に運営して軽食を提供したりする子育て支援。他にも、U・Iターン促進のための空き家ツアー・移住ツアーや農業体験などもある。住民が参加するだけじゃなくて、活躍できる場づくりが行われているのも、佐濃の地域づくりの特徴だ。

いろんな人を巻き込みたい

大宮町区長協議会は、年に一度みんなで地域のことを考える「おおみやわいわいミーティング」を開催しています。これは、地域活動と関わりの少ない住民の声を聞きたいとの思いから始まった取り組み。成長を続けるこの取り組みから、いろんな人を巻き込むヒントを探ります。

大宮町区長協議会では、持続可能な地域づくりを目指して、広域で多様な人とのつながりづくりを進めている。その一つが、誰もが参加できる住民ワークショップ「おおみやわいわいミーティング」。

3 大宮町 Omiya Omiya cho

〝話し合いの専門家〟に手伝ってもらう

〝いろんな人が気軽に参画できる地域づくり〟は、区長たちが掲げる強い思いです。どうすれば実現できるのか、悩んだ大宮町区長協議会では、他の地域の先進事例を研究して、地域のさまざまな人が参加できる住民ワークショップを開くことに決めました。

どう進めたらいいのか、何を話せばいいのか、最初は手探り状態。そこで大宮町区長協議会が相談した相手は、龍谷大学政策学部の学生たちでした。相談を受けた学生たちは、普段から話し合いの手法を専門的に勉強し、ホワイトボードにマジックで読みやすい文字を書くところから練習しています。

学生たちが、住民ワークショップの開催に向けてまず始めたことは、まち巡りでした。大宮町を訪れ、地域の人たちとの交流で得たヒントをもとに、準備を進めていきました。

人の集め方や意見の引き出し方、まとめ方、そして何より楽しませ方、そんな悩みは〝話し合いの専門家〟である学生たちに相談してみると、解決の糸口が見つかるかもしれません。

みんなで話すって楽しい

開催された住民ワークショップ「おおみやわいわいミーティング」に、区長たちは「普段聞けない人たちの貴重な声が聞けた」と得るものがあったよう。また、参加者からは「来る前は不安だったけど、みんなで地域のことを話すのは楽しい」などの感想があり、「大学生が地域に関わってくれると若いエネルギーを感じられる！地域が元気になる！」といった大学生の参加に喜びの声もありました。ワークショップは見事成功。普段、地域とは関わりの少ない人たちが、みんなで地域のことについて話し合う機会になりました。初めて会う人との会話は新鮮で、会場の中は笑顔にあふれていました。

いろんな人を取り込んで成長していく

こうして、大学生をはじめ若い世代や女性などの〝新しいチカラ〟を取り込むことで、ますます元気になっている大宮町。いろんな人を巻き込むって、地域の〝元気〟に欠かせないのかもしれません。

地域トピックス／大宮町

今や大宮町の恒例行事となった「おおみやわいわいミーティング」。ただ、令和元年の第1回目の参加者は、男性８割で 60 代以上が7割。これでは多種多様な人の意見を聞くことができなかった。そこで、開催案内チラシのデザインを可愛くしたり、スイーツを用意したりと工夫を重ね、3回目の参加者は男女比が半々で 50 代以下が70%に増加。「多様な意見が聞ける場」へ成長した。

公民館活動、どう続ける？

川上では、公民館活動が活発に行われています。
活発だけれど無理をしているわけではなく、誰よりも自分たちが楽しんで
取り組めるように形を変えながら公民館の活動を行っています。
川上の取り組みから、これからの公民館活動のヒントを探ります。

川上地区公民館のメンバー。自分たちが楽しむを忘れないメンバーがつくるイベントは地域を笑顔にしている。

4 川上 Kumihama kawakami

kawakami

公民館って何するところ？

公民館活動と聞くと、どんなことを思い浮かべますか。文化祭や運動会、健康講座、料理教室など、地域のさまざまな人が一緒に活動したり学んだりするイメージでしょうか。

川上には、昔から公民館活動が根付いています。「公民館は地域みんなで応援するもの」と地域の人たちが言うように、公民館活動には区長や地域の各委員などがいつでも応援に駆け付けます。しかし、近年はコロナ禍の影響で公民館活動が制限され、今まで通りの活動ができなくなっていました。その間も、川上の文化である公民館活動を守ったのは、地域の若者たちでした。

できることを、できる人で

「今までのようにできないのなら、できるように形を変えればいい」と若者たちが行事を計画。「各行事ごとの実施が大変なら組み合わせてみよう」「自分たちだけでするのが難しいなら外から人を呼ぼう」という風に、試行錯誤しながら活動を続け、川上の公民館活動は今につながっています。

地域に定着したやり方を変えるのは、簡単なことではないかもしれません。しかし時に、その状況に合わせて形を変えてみることが進むきっかけになるかもしれない、と川上の公民館活動は教えてくれます。

そして、その若者たちの取り組みを見守る大人がいたことも、すごく大事なことです。

誰よりも自分たちが楽しもう

〝楽しい〟は創るもの。もし参加するなら、楽しいイベントに参加したいと思うのは誰でも同じはず。川上地区公民館が運営するイベントは、とても楽しそうな雰囲気なのが特徴です。それは〝運営する側が楽しんでいる〟から。川上地区公民館の若者たちは、良い意味で運営側らしさがないんです。まるで、その立場を忘れたかのように出店を楽しみ、ライブがあればライブを盛り上げます。すると自然と参加者も楽しくなるもの。

この、会場全体でつくる楽しそうな雰囲気や活気が、川上の次の世代の公民館活動、ひいては地域全体の活動へとつながっていくのかもしれません。

ワークショップでアイデアをふくらます

地域トピックス／川上

川上では、令和4年度にむらづくり計画書の見直しがされ、さらに令和5年度は、計画を実践するアクションプランを作るため、たくさんの住民を巻き込んだワークショップで話し合いを重ねている。「何か一つでもできることからやってみたい」川上地区自治振興会のみんなはそう言う。地域の「やってみたい」を応援する川上。これからもどんどん“楽しい”ことが生まれていくだろう。

みんなの居場所をつくろう

久美浜一区の子どもたちには、長い休みの期間中も友達と集まることのできる居心地のいい空間「ONE THIRD」があります。
この空間はどうして生まれたのか。アイデアと行動力、スピード感満載の久美浜一区の取り組みからみんなの居場所づくりのヒントを探ります。

「ONE THIRD」の ONE は、久美浜一区の「一」と久美浜湾の「湾（ワン）」の両方の意味を持つ。
THIRD は、「第三の居場所」「三者三様」という思いを込めて名付けられた。

5 久美浜一区 Kumihama kumihama 1-ku

きっかけは子どもの声

久美浜一区のキーワードは〝子ども〟。地域の指針となる久美浜一区プランでは〝子どもが元気なまち〟を第一に掲げ、子どもを地域の宝としています。

そんな子どもたちから「家以外に勉強できる場所があったらいいな」という声が上がり、すぐさま地域の大人たちが動きます。久美浜福祉センターの2階を、勉強場所として開放することにしました。

できることから動いてみよう

まずは、試験的に2日間だけ開放することに。すると、20人ほどの中学生が集まったそうです。「ならば」ということで、さらに居心地の良い空間にするため、イスづくりのイベントを企画。イベントには、たくさんの子どもたちが参加し、木材を使って温かみのあるイスを作りました。手作りなので経費は少なく、それでいて、愛着はひときわ大きいものとなりました。

この部屋は「ONE THIRD（ワンサード）」と名付けられ、今では子どもたちだけでなく、大人もゆったりとした時間を過ごせる空間となっています。難しく考えず、できることからすぐ動く。久美浜一区の強みです。

苦手なことより得意なことをしよう

久美浜一区の谷口潔自治会長は「みんな一人一人が、特技や持ち味、強みをそれぞれの立場で発揮して、力を合わせればより大きな力となって確実に前に進める」と思いを語ります。

地域おこし協力隊の野口加奈恵さんもその一人で、自身の持ち味を発揮して、さまざまなイベントを企画しています。〝環境にやさしい買い物を地域に広めたい〟という思いから開催した量り売りのイベントでは、子どもたちが自分の持ってきた容器に、食べられる分だけポップコーンを入れ、それを量って買います。これなら、ごみやフードロスを減らせて、自然とエコを学ぶことができます。環境問題に取り組む野口さんならではのイベントと言えます。

こんな風に、それぞれが出来ることで貢献すれば良いだけなのです。久美浜一区では「ONE THIRD」の進化を見守ることが、谷口自治会長の思いへの答え合わせになりそうです。

地域トピックス／久美浜一区

久美浜福祉センターには、もっと小さな子どもたちが過ごす「しおかぜルーム」もある。これも地域の子育て世代から上がった声に「場所の開放だけならすぐできる」とスピード感をもって実行した事例。住民にとって、素早く自分たちの声が届くのはありがたい。自治会への信頼感も増していく。その信頼がさらに仲間を増やし、出来ることも増えていく。これを久美浜一区は大切にしている。

花火で地域づくりって？

豊かに栄えると書いて豊栄地域。
地域を元気にするため、十数年ぶりに花火大会を復活させようと
動き出したプロジェクトがあります。どうやって花火を復活させたのか。
そんなプロジェクトにまつわる地域づくりからヒントを探ります。

小さな花火でも近くで見られるからすごい迫力。自分たちで打ち上げた花火なら、その感動はひとしおだ。

資金の集め方にも意図がある

「トヨサカファンディング」、そう名付けられたプロジェクトを実施した豊栄。これは、地元の魅力的な産品や体験を返礼品にして、地域の活動に支援・寄附をしてもらうという、いわばローカル版クラウドファンディングです。

ことの発端は令和2年、豊栄で何か面白いことをしたいと思うメンバーが集まって企画した豊栄夏花火。地域の人たちから寄附金を集め、集まった資金で花火を打ち上げたのです。もちろんこのトヨサカファンディングは、地域外の人も応援できる仕組みですが、なぜ豊栄は、もっとたくさんの人の目に触れる方法を選ばなかったのでしょうか。それは「自分たちで一緒に打ち上げた花火だ！」そう感じる体験を、地域の人たちにしてもらいたかったからです。

豊栄ファンの発掘にも

地域づくりで重要なことは、その地域に暮らす人たちが、自らの手でより良い地域の暮らしをつくっていくことです。豊栄がこの手法を選んだのは、このトヨサカファンディングが地域づくりそのものだったからなのでしょう。参加した人の中には、ノーリターンで支援する人もいました。地域のことが大好きで、応援したい人はたくさんいます。こんな発想が、〝地域〟と〝地域を応援したい人〟をつなげるきっかけになるかもしれません。

地域の魅力を発掘しよう

ファンディングプロジェクトを始める上で一番重要なのは、返礼品の準備です。豊栄では、地元の名物やここでしかできない体験など〝豊栄にしかない魅力〟を返礼品として準備しました。

ローカルなファンディングプロジェクトは、地域に根差しているからこそ、魅力を発掘・再認識する絶好のチャンス。「ここには何もないから…」、それは違います。人やモノ、場所、地域によってさまざまですが、あなたの地域にも魅力は眠っているはず。〝当たり前〟を違う角度から見てみると、実はその地域ならではの魅力だったりします。

地域に眠る魅力を再発掘するも良し。新しい魅力をつくりだすのも良し。可能性は無限に広がっています。

あなたの地域の魅力は何ですか？

花火前の地蔵盆

返礼品の木製うちわ

地域トピックス／豊栄

豊栄夏花火は、令和2年から3年連続で打ち上げられている。ほんの5分、豊栄の夜を彩る花火。何百発も打ち上げなくても、地域の人が「自分たちで花火を打ち上げた」、その体験こそが一番の成果。それが地域の元気や笑顔だったり、地域の魅力再認識につながったりする。花火を上げることも、花火を見ることも、全部が地域づくりにつながっているのである。

6 豊栄 Tango toyosaka

新コミュのススメ
KOHO KYOTANGO BESSATSU

写真 / snapshots
「私たちがつくる地域」

yasaka
/ 吉野校区
伝統の継承活動

kumihama
/ 佐濃
チーム佐濃の活動

yasaka
/ 鳥取校区
防災マップづくり

mineyama
/ 五箇
月輪田の田植え

tango
/ 豊栄
花火〔オリジナル木製うちわ〕

kumihama
/ 湊
ぎょそん戦隊ピチピチ祭

tango
/ 宇川
漁師町のひととき

amino
/ 島津
みんなのわくわく実験場

omiya
/ 大宮全域
わいわいMTG

kumihama
/ 久美浜一区
しおかぜルーム

yasaka
/ 野間
野間の保健室

kumihama
/ 川上
むらづくり計画 WS

kumihama
/ 久美浜二区
美しい風景

子どもとつくる地域って？

湊地域では、コロナ禍の影響で地域の楽しい行事が全部中止に。
そんな中、“子どもたちを楽しませたい！”と立ち上がったメンバーがいました。
その名も「ぎょそん戦隊」。子どもたちに大人気のぎょそん戦隊の活動を通して、
子どもと一緒に地域をつくるためのヒントを探ります。

第２回ぎょそん戦隊ピチピチ祭のビンゴ大会の様子。マイクを持つぎょそん戦隊中心メンバーの岡野さんも子どもたちの声に負けないくらい元気いっぱい。どのコーナーも大盛況で行列ができていた。

まずは子どもを楽しませよう

どの地域も一度は〝どうしたら子どもが楽しんでくれるか〟を考えたことがあるはず。湊では子どもを楽しませるため結成された若者による有志団体「ぎょそん戦隊」と自治会が連携して、湊独自の縁日「ぎょそん戦隊ピチピチ祭」を行っています。

去年から始まったこのピチピチ祭、開催に至るまでには、さまざまな課題があり、それをぎょそん戦隊と自治会が力を合わせて1つずつ解決していきました。いざ祭を開催すると、そこにはたくさんの子どもたちの笑顔があり「地域にこんなに子どもがいたんか」と地元の人が言うくらいの賑わい。また、それに併せてお父さんやお母さん、おじいさんおばあさんまで、たくさんの大人たちが一緒にやって来て、まさに大成功のイベントとなりました。

子どもの笑顔は大きなパワー

地域で何か企画しようとすると、資金やスタッフ、集客などの課題や不安がたくさん出てきます。それをクリアしていくのは大変で、悩みは尽きないものです。ですが、そんな壁を吹き飛ばし、地域の大人も巻き込んでいく、子どもの笑顔にはそんなパワーがあります。何より、たくさんの地域の人が顔を合わせる機会を作れたのは、大きな成果ではないでしょうか。〝子どもを楽しませたい〟その気持ちがあれば、きっと全力で楽しんでくれます。

子どもの声を聞いてみよう

一度やってみると、祭の雰囲気や改善点など、いろいろなことが分かってきます。次はどうするべきか。子どもを楽しませることを考えるぎょそん戦隊は、子どもに聞くのが一番と、ピチピチ祭が終わった後、子どもたちにアンケートを行い、声を集めてみました。すると「○○したい！」「○○が好き！」「○○が欲しい！」など、さまざまな好みや要望の声が届きました。

さぁ、これで次にやることのアイデアは集まりました。ピチピチ祭で〝楽しい〟を知った地域の人たちと、自信を得たぎょそん戦隊メンバーやスタッフ。これから湊には、どんどん楽しいことが生まれていきそうです。

ぎょそん戦隊のメンバー

地域トピックス／湊

“子どもたちを楽しませたい”と考える地域の若者たちと自治会とをつないでいるのは、岡野真奈美さん。自治会の事務をしながら地域づくりにも携わっている岡野さんを含むぎょそん戦隊のメンバーには、子育て中のメンバーも。子育てや仕事をしながらでも、地域づくりに関われる可能性を見せてくれている。

防災×結束力

いやさか鳥取校区地域づくり協議会は結束力が強く、さまざまな活動を協同で推進。
ひときわ活発に活動しているのが防災部会です。昨今、防災意識が高まる中、
気負わず果敢に挑む姿勢からみんなで助け合う地域づくりのヒントを探ります。

大学生とともに、カードを使って災害時の対応をシミュレーション。防災への意識は強い。

8 鳥取校区 Yasaka Tottori ko-ku

〝地域の共通課題は何か〟を考えてみよう

京都北部を中心に、大きな爪痕を残した北丹後地震から間もなく100年が経ちます。今でも「またあの規模の地震が来たら」と誰もを不安にさせるほど、多くの被害を出した地震でした。

以前から、鳥取・木橋・和田野の鳥取校区3区は、急傾斜地が多く、竹野川にも近いことから土砂災害や浸水被害に注意が必要な地域という共通の課題がありました。そこで、鳥取校区では、大きな災害が発生した時、避難所の開設や運営を地域主体で行うために合同で取り組みを始めました。

〝防災意識〟を高めよう

鳥取校区では、毎年8月に行われる市の防災訓練に合わせ、避難所開設・運営の訓練を実施。また、そのノウハウを共有するため、防災訓練の内容を踏まえた独自の「避難所開設・運営マニュアル」を作成、改良や更新を重ねながら全戸配布するなどの取り組みを通して、地域の結束が強まりました。

〝助かろう〟より〝助けよう〟

〝助かろうとするための行動をしてください。僕たちが助けますから〟という防災部会からのメッセージには「自助」「共助」の思いが込められています。普段から家族で災害について話す事や、隣近所とのあいさつや声掛けなど日頃のちょっとしたコミュニケーションで、近所が持つ課題などが分かることもあります。お互いを少しだけ気遣う事が、自助共助になり、ひいては地域に貢献する。鳥取校区では、その日から始められる活動から防災意識が醸成されています。

学生たちと考えて〝備えよう〟

鳥取校区では、摂南大学と協同で訓練を行ったり、追手門学院大学の学生と一緒に「防災マップ」の作成などを進め、令和5年度中には和田野区版マップが完成予定。若い力の協力も得て、分かりやすい頼りの防災ツールとして活用が期待されます。鳥取区や木橋区版も、作成に向け準備を進めています。防災マップは、避難イメージを明確にして一時避難所や消火栓、防火水槽の場所を落し込んだ地図です。使わなくてよいのが一番ですが、「備えあれば憂いなし」です。

ソフトボール大会

地域トピックス／鳥取校区

防災への課題意識から行動を始めた鳥取校区はきめ細やかにコミュニケーションを図り、広域連携組織を発足し、民生委員、福祉委員の懇談会やソフトボール大会など地域の活動も多分野で活性化。また、いざという時、お互いに助け合える「ご近助マップ」の作成も検討中。結束し互いが分かり合える地域を目指すのが鳥取校区の強みだ。

よそ者って何してくれるの？

移住を検討している人に“気軽に地域の暮らしを体験してほしい”と
自分たちでシェアハウスをつくってしまう島津地域。
移住者の受け入れにチカラを入れる島津地域から「よそ者」と一緒に
取り組む地域づくりのヒントを探ります。

シェアハウス「ニケ荘」は地元のメンバーの手でリノベーションされた。名前の由来は、素人に毛が生えた仲間たちでつくったから。
ちなみに、ニケはギリシア神話に登場する勝利の女神でもある。

9 島津 Amino shimazu

shimazu

笑顔で声を掛けてみる

「隣の空き家に都会から移住者がやってくる」そう聞くと、皆さんはどう思うでしょうか。「どんな人が来るのか不安だ、仲良くできるかなぁ…」そんな風に思ったりしていませんか。ましてや、外国の人だったら「言葉も通じないし文化も違う、理解し合えるのかなぁ…」とか。しかし、島津の取り組みを見ると、そんな不安は取り越し苦労だと気付きます。

移住者、つまり〝よそ者〟が起こす新しい風は、地域を活性化させ、そこで暮らす人たちも元気にしてくれます。それにいち早く気付いた島津の人たちは、積極的に移住者を受け入れ、交流しながらお互い助け合い、暮らしを支え合っています。だから島津は、陶芸家さんやYouTuber（ユーチューバー）さん、カレー屋さんに地域おこし協力隊、いろんなよそ者が集まるエリアになっています。そんなよそ者と仲良くなるには、まず笑顔で声を掛けてみることです。

自分なりのカタチで

例えば、移住してきた人が地域の空き家を使って、何か新しいことを始めようとしているとします。そんな情報が自分のところに届いたら、ぜひ応援してあげてください。応援のカタチはいろいろあるから身構えずに。敷地の草刈りや掃除を手伝ってあげたりはもちろん、「がんばって！」と一言掛けるだけでも応援です。暖かい目で静かに見守ること、それもまた応援。そこが飲食店なら、食べに行ってあげることも全部が応援になります。

新しい地域の芽をみんなで育てよう

応援された人は、それを励みに頑張ることができるかもしれません。その頑張る姿を見ると、きっともっと応援したくなるはずです。いわゆる相乗効果です。

おもしろいことの始まりの〝芽〟は、人のやさしさが集まる、温かい場所に芽吹きやすいもの。大切なのは、地元の人もよそ者も関係なく、地域のみんなでその芽を見守り、応援して育てていくことです。そうやって育てた芽は、やがて地域を支える〝太い幹〟へと成長してくれるのではないでしょうか。

完成したニケ荘

地域トピックス／島津

「島津ふれあいセンター」。お年寄りも、学校帰りの子どもたちも、移住者も、みんなが自然と集まってくる場所。連合区長の三野徹男さんは言う。「形あるものはいつか壊れる。壊れたらまた直せばいい」。例えば、夢中になった子どもたちが、もし何かを壊してしまった時はちゃんと謝って、みんなで直す。傷だって味になる。ここは、島津の温かさを象徴する場所である。

みんなで農地を守るには?

久美浜二区では、令和２年４月に久美浜二区振興会を発足し
地域づくりや農業問題の解決に向けて会議を重ね、区長会との連携、
４つの専門部会とより密接なコミュニケーションを図ってきました。
地域の風景を守るために必要なものは何か、ヒントを探ります。

美しい田園風景を広域活動で守り続ける久美浜二区。

10 久美浜二区 Kumihama kumihama 2-ku

「農」への意識、関心の醸成を

久美浜二区は、美しい田園風景が広がる地域。この風景は、どうやって守り続けられているのでしょうか。そこには、たくさんの地域の人の力が結集されているのです。

他の地域と同様に、久美浜二区も人口減少や高齢化、農業者の減少によって、田畑の耕作や畦道の草刈りなどが困難になってきていました。この状況を打開するため、具体的な課題を洗い出し、どう解決していくかの会議を重ね、営農の共同化の必要性や農業に関する意識、関心の醸成を目的とした「将来の二区の農業を考える懇談会」を開催してきました。

広域で手を取り合い 次世代につなげよう

それぞれの考えをぶつけ合い、導き出した答えは、区の垣根を越えて広域的に連携し農地を守る組織「久美浜二区広域協定」を発足させることでした。推進の合言葉は「まだ余力のある今の世代で!仕組みを変え、考えないと!手遅れになる!という強い思いを持って、今こそ広域化に取り組み次世代に送る」。地域の強い危機感と連帯感が、この美しい田園風景を守り続けています。

地域の運営にも 経営マインドを取り入れよう

久美浜二区が推進してきた広域活動の良さは何でしょうか。それは、広域活動にすることで多くの人を巻き込めること。また、煩雑だった事務作業が一本化され、個別に行っていた事務の負担も軽減されました。そして、農機具を共同利用したり、集落単位で取り組んできた交付金を広域で有効活用したりすることで、農用地や水路、農道などの農村環境の保全活動を、より効率的に行えるようになりました。加えて、コミュニティビジネスの取り組みも盛んとなり、その推進のために早くから「地域版ふるさと納税」にも挑戦して、活動への支援を募っています。

ヒト・モノ・カネ・情報といった経営資源を有効的・効率的に集中させることで、地域活動を持続可能なものとしてきた久美浜二区。経営マインドを意識した手段やアプローチで積極的にトライしています。

地域トピックス／久美浜二区

久美浜二区振興会では、3つのコミュニティビジネスに取り組んでいる。1つ目は各家庭で不要になったモノを必要とする人につなぐ「らく市らく座」。2つ目は地域の人たちが農作物を持ちより実施している無人販売所「にくちゃんファーム」。そして、3つ目は段ボール・新聞紙・空き缶等の回収。みんなで力を合わせて収益を上げていく、これが久美浜二区の持続可能な姿である。

伝統は笑顔でつなぐ

吉野には、赤米という地域の宝があります。
しかしこの赤米、一度は途絶えてしまった空白の期間もあったとか。
伝統の復活・継承を通じて、地域に宝を生み出している吉野から
伝統の繋ぎ方のヒントを探ります。

芋野郷赤米保存会が主催する赤米の稲刈り。地域の子どもたちにとって楽しみな秋のイベント。
この体験を通して、自然と地域のつながりや伝統の大切さを学んでいるのかも。

11 吉野校区 Yasaka yoshino ko-ku

yoshino ko-ku

「おもしれぇ」そう思えることから始めてみよう

吉野には、毎年恒例になっているイベントがあります。それは〝赤米〟の春の田植えと秋の稲刈りです。芋野郷赤米保存会が中心に行っている吉野の継承活動ですが、今では、地域外からもたくさんの仲間が集まります。中には東京から参加する人も。何でそんなに人が集まってくるのか。その答えはとても簡単。〝おもしろい〟からです。

温かい保存会のメンバーの人たちや楽しむ子どもたちの笑顔がそう感じさせるのか。はたまた、赤米からそんな成分が分泌されているのか…。みんなで汗をかきながら畑仕事をして、泥だらけで達成感を共有し、赤米を使った美味しいご飯を食べて一緒に笑う。そりゃあ、次の年も行きたくなるし、家族や友達を呼びたくなるのも頷けます。

このイベントにたくさんの人たちが参加するようになったのは、保存会の創設メンバーが「自分たちのおもしれぇを信じて続けていれば、人は自然と集まってくる」と笑顔を絶やさなかったから。赤米の伝統をつないできたのは、その場、そして〝笑顔〟なんです。

集まる場を復活させたい

もう一つ、吉野で復活した伝統行事があります。それは〝どんど焼き〟。かつては地域の人が集まり、正月飾りや書き初めなどをお焚き上げしていましたが、いつしか途絶えてしまった行事です。しかし、どんど焼きが途絶えてみんなで集まることは無くなっても、各家庭の焚き火などでは細々と続けられてきました。これは、心のどこかに伝統を続けていきたいという思いがあったからだと思います。その思いと、人が集まる場をつくりたいという地域づくりへの思いが、どんど焼きを復活させました。最初の年は、現在の「いやさか吉野地域づくり協議会」の役員数名でしたが、復活から3年、その場は、地域のみんなが参加する〝賑やかな場〟に戻ろうとしています。

伝統をつなぐものとは

〝伝統を守りたい〟という気持ちは、人が集まるきっかけにできる。そして、人が集まると笑顔が生まれます。しつこいかもしれませんが、伝統をつなぐのは場と〝笑顔〟なんです。

赤米

地域トピックス／吉野校区

赤米復活の発端は、郷土史家である故芦田行雄さんが、「芋野の赤米が平城京に献上されていたと記された木簡が見つかった」という記事を目にしてロマンを感じ、途絶えていた赤米を復活させようと孤軍奮闘したことが始まり。復活栽培に成功したのが今から約40年前。その後、芋野郷赤米保存会がその遺志を継ぎ、少しずつ協力してくれる仲間を増やしながら今に至っている。

元気の秘訣って？

長寿のまち京丹後。
よく食べ、よく動き、よく眠るのが健康には一番！と言いますよね。
元気であり続けるには気持ちと身体、どちらも大事です。
野間独自の取り組みから、地域が元気であり続けるヒントを探ります。

「野間の保健室＆運動会」合同開催後の一幕。健康チェックから運動、みんなでの食事。
元気の秘訣を象徴するかのようなシーン。

12 野間 Yasaka noma

〝チカラ〟は貸すモノ借りるモノ

現在、野間に住んでいる人の数は約150人ほど（令和5年10月時点）。この地域では、住民みんなで助け合うのが当たり前となっています。そんな〝当たり前〟の中で、暮らしを守っていけるのは理想的なことかもしれません。もし、今の生活の中で不安に思うことや一人では難しいと感じることがあれば、周りの人にチカラを借りてみてはどうでしょう。

そんな簡単にチカラを貸してくれる人なんていないって？そんなことありません。例えば、今は都会に住んでいても京丹後で育った人、自然が大好きな人、おいしい食べ物に引き寄せられて訪れる人。みんなチカラを貸してくれるかもしれません。

元気の源はどこから？

実際、野間では地元出身の起業家さんが、地域の人たちを元気にする取り組みをしています。そして、その人の呼び掛けで、市外にいる地元出身の仲間たちも駆けつけてくれます。地域の助け合いの輪の中に、外からの応援が加わると、気持ちはもっと元気になるし、できることも格段に増えます。たくさんのチカラを借りることも、元気な気持ちを支える秘訣なのかもしれません。案外、身近なところに〝元気をくれる人〟はいるものです。

まずは自分の健康状態を知ろう

〝元気でいるためには身体が健康なのが一番！〟野間には、健康維持に欠かせない取り組み「野間の保健室」があります。これは、医療や福祉サービスが届きにくい場所にある野間において、地域の人たちが自分の身体と向き合えるコミュニティサロンで、サロンを運営するのは、リバイタライズジャパンという会社。代表を務めるのは、野間で生まれ育った三本大介さんです。ここでは、さまざまな機器で健康チェックができて、自分の身体の状態を数値化して見ることができます。サポートスタッフもいるから、気になることはその場で相談もできる、まさに〝健康維持を自分事化する〟取り組みです。

地域の元気を守るなら、まずは住民の健康から。あなたも健康診断を受けてみては？野間に引っ越すというのも一つの手、ですけどね。

地域トピックス／野間

地域の宝ともいうべき野間川。「田舎だから何にもない」そんな言葉を耳にするが、そんなことを言っていると野間の人たちに笑われるだろう。近くにあるものの偉大さ・大切さに気付いていないの？と。当たり前のように流れる水が、どんなに大きな恵みを与えてくれるか。それに気付いているから野間の人たちはこの川を誇りに思う。地域の宝は何なのか。その答えを探すことはすごく大切な気がする。

みんなの地域はみんなで守る

京丹後市最北端のまち、丹後町宇川。14の集落と約千人の人口で成り立ち
丹後ブルーの日本海や国の重要文化財の経ケ岬灯台、袖志の棚田などの豊かな資源に恵まれた地域です。
宇川では“自分たちの力”と“外からの力”を掛け合わせた地域づくりが行われています。
そんな宇川から、“みんな”で地域を守るためのヒントを探ります。

毎年８月に丹後町平の中瀬橋親水公園で開催される「宇川アユ祭り」。
昔から続く宇川のアユ漁を学生たちが見て学ぶ。

13 宇川 Tango ukawa

〝自分たちで〟やってみよう

令和が始まった年、宇川地域の買い物の場であり、交流の場でもあった唯一のスーパーが閉店しました。

高齢化や移動手段がないなどで、買い物の困難な人が増える可能性が予想される中、宇川を救った人たちがいます。それが宇川加工所です。「地元食材で宇川を元気に！」を合言葉に結成された活動グループで「スーパーがなくなったらどうしよう」という地域の声を聞いて、メンバー自ら市内の移動販売業者に直談判し、宇川まで販売に来てもらえることに。貴重な買い物と交流の場を守ったのです。

他にも、地元協議会を中心にさまざまな団体が連携し、手作りマルシェ「宇川金曜市」を開催して惣菜などの買い物を支援したり、丹後町のＮＰＯ法人がUber（ウーバー）のアプリを用いたライドシェアサービス「ささえ合い交通」で住民の移動を支援したりと、地域にないものを自分たちで創り出しています。無いなら自分たちでやろう！というのが宇川流なんです。

地域の未来について話し合ってみよう

これらの取り組みは、地域内の活発な話し合いが生んだもの。宇川にはさまざまな協議や対話の機会が設けられています。中でも象徴的なのが「宇川つながるミーティング」。年齢や性別、所属に関係なく、誰でも気軽に参加できる話し合いの場です。この話し合いから生まれた取り組みの一つが宇川金曜市。また他にも、宇川が好きな人がみんな集まってご飯を食べる交流会や、地域外の人と一緒に行うビーチクリーンなど、多くの取り組みが生まれています。地域の未来を話し合う中の一言から、実現に変わることもあるかもしれません。

外の人の力も借りてみよう

宇川では、地域の外の人と連携した地域づくりも行っています。例えば、大学生と連携して、宇川産の素材を使った商品の開発や観光パンフレットを作成したり、地域おこし協力隊など移住者の力を借りて買い物支援も行っています。

宇川は、自分たちの力と地域の外からの力を合わせることで、地域を守る仲間の輪を広げ、活力ある地域づくりにつなげています。

地域トピックス／宇川

大学生と子どもたちの田植え

たくさんのプレイヤーが活躍し、たくさんの取り組みが生まれている宇川。今あるさまざまな取り組みをどのように連携させるか、今後の宇川を考えるため、これまでの枠組みを超えた連携組織の設立を検討中。この組織が宇川の数々の取り組みとつながったとき、“新しい”宇川として生まれ変わるだろう。

新コミュのススメ

KOHO KYOTANGO BESSATSU

新コミュとは
みんなが主役の地域づくり

① 地域の現状と課題

京丹後市には225の自治区があり、伝統文化、催事、福祉、農地保全など、さまざまな地域活動が自治区の助け合いや支え合いで実施され、ふるさとの誇りや記憶をつくり出してきました。近年、日本の人口減少と高齢化が進み、本市においても、限界集落の数はここ10年で3倍に増加しています。令和4年度に実施した区長全員アンケート調査によると、地域活動の継続が困難だと回答した区長は19㌫と、人口減少や高齢化により自治区の機能低下が懸念され、地域活動の継続が危惧される状況です。

② 地域づくりに参加しよう

また、令和2年度に無作為に抽出した市民2千人を対象に行ったアンケート調査によると、地域に愛着を持っている人は約80㌫と高い数値になった一方で、地域活動に参加していると回答した人は約50㌫にとどまり、特に若者や女性の参加率が低いという結果が出ました。一方で、令和5年度、市区長連絡協議会が行った地域づくりアンケート調査では、若者や女性は、地域づくりへの参加に意外と前向きだということが分かりました。

③ 新たな地域コミュニティ ～新コミュの推進～

本市は、令和3年度、市長公室に地域コミュニティ推進課を設置し、「新たな地域コミュニティ推進事業（新コミュ）」をスタートしました。この事業は、旧村や地区公民館など複数の自治区にまたがる広域での連携促進、若者や女性の参画という2つの柱を軸に、多様な住民の参画と多彩な地域活動を促進し、誰もが元気で住みよい持続可能な地域づくりを進めるものです。

地域コミュニティには、①地域防災、②地域福祉、③子育て、④生涯学習、⑤関係人口、⑥稼ぐ取り組み、を期待しつつ、地域の実情に合う取り組みからスタートしてもらうため、3つのステップを用意。取り組みが段階的に進むよう促し、運営の基盤となる組織づくりや課題解決事業の実践を支援しています。

平成16年に6町が合併して誕生した本市は、旧町ごと、さらには旧町の中でも市街部と農村部など、地域ごとに自治の成り立ちや状況が異なります。それら地域の実情や課題に応じた横断的な支援を行うため、旧町ごとに配置している市民局と地域公民館、そして地域コミュニティ推進課の3者が協力して6つの推進チームを立ち上げ、情報共有を密にしながら伴走支援を行っています。また、令和4年度からは、社会福祉協議会と連携して地域共生ステーション事業に取り組み、C・S・W（コミュニティ・ソーシャル・ワーカー※援護を必要とする高齢者や障害者、子育て世帯などをサポートするスタッフ）を旧町ごとに配置しています。

地域振興と社会教育、地域福祉の分野で市役所内連携を強め、一体となって地域への支援を行っていることが、本市のコミュニティ施策の特徴でもあります。

④ モデル地域が増加 ～多彩な活動で地域が元気になる～

新コミュに取り組むモデル地域の数は年々増加しており、事業を開始した令和3年度に6つだったモデル地域は、令和5年度には20を超えました。また、令和4年度に開催された新たな地域コミュニティ推進大会には、230人以上が参加し、モデル地域の取り組みに注目が集まりました。大会後のアンケートでも、参加者の約90㌫が「参考になった」と回答するなど、機運の高まりが見られます。

そのモデル地域には、具体的な効果が出てきています。久美浜一区自治会は、地域運営の体制を見直すことにより、会議数や自治区役員の業務などを約3割削減。またICTを活用した事務局運営システム導入により、30代の若手が副業として事務局長を担うなど、若年層の参画につながっています。移住対策に積極的に取り組んでいる佐濃自治会は、空き家調査や所有者への働きかけ、移住体験ツアーなどを通して、令和4年度には14組の移住者の受け入れを実現しました。

他にも、担い手不足で途絶えかけていた高齢者サロンを多世代型のサロンにすることで活気を復活させた地域、農地保全活動を広域化し事務局を集約し、保全面積の拡大に成功した地域など、地域内のつながりを強めて、若者や女性、時には地域外の協力者など多様な方が関わることで活動が多彩になりコミュニティが活性化しています。

⑤ 稼ぐ地域を目指して ～協同労働とふるさと納税の活用～

現在、地域コミュニティの運営や活動を支援するため、地域がそれぞれの実情に合わせて柔軟に活用し、地域課題の解決に取り組めるよう「地域コミュニティ活動交付金」の全市での導入に向けた検討を進めています。また、地域の稼ぐ力の強化にも取り組み、労働者協同組合制度を活用した地域課題の解決や地域づくりを仕事にするため、全国の自治体に先駆けて制度の周知や相談体制の整備、組合の運営を支援する補助制度も創設しました。また、課題解決事業を推進するプレイヤーとして、多様な任用形態の地域おこし協力隊を地域に配置。空き店舗を活用した創業など〝稼ぐ〟動きが起きています。さらに、地域課題の解決プロジェクトの財源をふるさと納税で集める取り組みも始めており、地域の〝やりたい〟に共感して寄附した人たちが地域を訪れ、地域のファンになってもらう。それが次の寄附へとつながるような仕組みづくりにチャレンジしています。

地域コミュニティの持続発展には、地域の主体的な取り組みに加え、人材と資金が不可欠です。本紙で紹介したような創意あふれる活動の中で、人材と資金が循環し、地域課題を楽しみながら解決していくような、そんな仕組みづくりと、市民一人一人が地域づくりの主役になっていく本物の地方創生を進めていきましょう。

自分たちの地域は
自分たちでつくる。

制作：京丹後市役所 地域コミュニティ推進課
秘書広報広聴課（広報京丹後 別冊版）

問 地域コミュニティ推進課
TEL 0772-69-1050

広報京丹後
はコチラ